

〈書評〉

中村隆之著

## 『野蛮の言説——差別と排除の精神史』

春陽堂書店 二〇二〇年

弓削尚子

「人間にとって〈野蛮〉とは何かを素描する」というのが本書の趣旨である。人間のもつ闇、文明が抱える闇をえぐりだそうとする壮大な試みである。そのために著者は、「他者を蔑視し、他者の支配を正当化する言葉が西洋において数世紀をかけて蓄積されてきた過程」をたどる（第一部〈野蛮〉の源流、第二部 啓蒙思想と科学の時代、第三部 植民地主義からホロコーストへ）。「野蛮」はギリシア以来、西洋において文化と知性を装う。「他者／非西洋」を「野蛮」ととらえる西洋の認

識については、とりわけポストコロニアル研究以降、多くの先行研究が蓄積されてきた。著者はこれらを手際よく整理し、新大陸獲得の「国際法上の問題」や啓蒙思想家たちの「人種」論、「科学的」見地に立つ進化論や優生学へと連なる系譜を、平易な言葉で明晰に講じている。

幅広く多様なテーマを掘り下げて論じる著者の力量には感心させられるが、フランス文学・カリブ海文学の専門家ならではの考察が、やはり印象的である。

アルチュール・ド・ゴビノーの『人種不平等論』（一八五三―五五）は、「最優秀なアリア人種」という神話を創出し、その後のヨーロッパに多大な影響を与えた。同時代のエルネスト・ルナンは、連帯を「国民」の精神的原理とする共和主義的な思想で知られるが、彼もゴビノーに共鳴し、「優等人種が劣等人種や退化した人種の刷新を図ることは、人類にとって神の摂理そのものである。」と論じている（『知的道徳的改革』一八七一）。ゴビノーに対するルナンの共感を厳しく批判した

のは、マルティニーク島出身の評論家、エメ・セゼールである。植民地化という行為こそが、西洋人を「非文明化し、痴呆化／野獣化し、その品性を墮落させた」（『帰郷ノート／植民地主義論』一九三九／五五）という彼の言葉は、著者の立場を代弁するものであろう。

人道主義者と評価されている人物においても、著者はその内奥に潜む野蛮の言説をえぐりだしていく。ナチスのユダヤ人迫害よりも規模の上で凌駕するといわれる、ベルギー国王によるコンゴ住民への圧政は、ジャーナリストのエドモンド・モレルによって暴かれ、国際的に知られるようになった。コンゴ住民に対する国王の非人道的な処遇を糾弾したモレルは、しかしながら、第一次世界大戦後、別の顔を見せる。フランスが、敗戦国ドイツのラインラント占領地に一部、アフリカ植民地兵を送り込んだことで、ドイツ国内に人種主義的な反対運動が巻き起こった。占領地内のドイツ人女性が犯され、黒人との「混血児」が生まれるという恐怖心がおおられ、「黒い恥辱」と呼ばれる黒人兵反対キャンペーンが展開し

た。これに関わったのがモレルで、ヨーロッパに「原始的なアフリカの野蛮人」を派兵したフランスを強く非難した。

モレルもまた野蛮の言説を生み出す側であった。著者は、このキャンペーンがフランスの「混血国家」を論じるヒトラーの言説へとつながっていくことを明示する。

モレルとヒトラーを結ぶ線など、思いもよらない。ドイツ史研究の立場から補足すれば、「ラインラントの混血児」は一九三〇年代後半、三〇〇人以上がナチスの人種政策によって断種された。ゴビノーの言葉を借りれば、「混血」は「人種の退化」を招くからである。

これでもか、これでもかと、描き出される野蛮の言説の連鎖。著者は「差別の言葉の圧倒的蓄積を知ること」の重要性を訴えるが、読者は字義通り、これに圧倒され、どのように抗うことができるのかと思索し、途方に暮れる。

それは単なる言葉ではない。人びとの感情に訴えかけ、行動へと駆り立てる大きなエネルギーを伴う。そし

て対象にされた「他者」の生身の体を切り刻み、命を奪う野蛮な行為に帰結する。著者が自らに課した、「闇を葬ることなく、これを明るみに出していく作業」が首尾よく遂行されればされるほど、立ち向かう「敵」の大きさに、読者は打ちのめされてしまう。

「文明社会では、弱い人々も子を残すことができるようになった。……これが人類にとってはなほだ悪い影響を与えることを疑いはしないだろう。」とダーウィンは述べる（『人間の由来』一八七二）。障害や「不治の遺伝的素質」をもつ者が、「……人為的に命を長らえ、成長したとしても、そこから人類はどのような利益を得るのだろうか。」と問うてヘッケルは「新生児の選別」を勧めた（『生命の不可思議』一九〇四）。これらが海の向こうで綴られた、過ぎ去った過去の野蛮の言説ではないことを、読者の誰もが知っている。

著者は、こうして日本社会の近現代へと対象を移し（第四部 日本社会の〈闇の奥〉）、「他者蔑視の言説とその暴力を支えるものが、実は私たちの社会の奥底にある

のだとする認識を提示」する。アイヌや琉球などに暮らす「土人」を「展示」した「人類館」事件、関東大震災における朝鮮人虐殺、被験者を「マルタ」と呼んで生体実験を行った七三一部隊、現代日本の人種差別・障害者差別を象徴するヘイトスピーチと相模原事件。日本の〈闇の奥〉は、読者の心をさらに突き刺してくる。

こうして、闇を明るみに出した先に何があるのか。読者はそれをすべて自ら引き受けて考えなければならぬのか。

最終章で著者は、「陳腐に聞こえるかもしれないが」と断った上で、「野蛮の言説」は人々の「共通感覚」としての常識に潜在的に宿っており、そこから逃れるためには、常識を相対化し、「自分の意見や判断の根拠を絶えず検証するよう努力する」しか方法はないと述べている（三三二頁）。

立ち向かわなければならぬのは、自分の内面化した価値観の中に無意識にもっている「野蛮」である。それは、誰の心の裏側にも暗く広がっていて気づかれない。

むしろ自分は常に正義の側にいると信じている。

本書の狙いは、「〈野蛮の言説〉がなぜ生み出されてしまうのか、それを本当に克服することができているのかを一緒に考えること」（一九頁）だという。著者の優れた考察によりまとめられた「差別と排除の精神史」を読了して、願わくは、その克服について著者の考えをさらに聞き、論じあってみたいと思うのだ。